

監訳にあたって

整形外科疾患は救急外来でもプライマリ・ケア領域においても頻度が高く、なかでも骨折は誰しもが経験する疾患ではないでしょうか。

そのような骨折診療における救急医の達成目標とは何でしょうか。初期臨床研修における救急外来であれば専門科へのアクセスが非常によい本邦の利点を活かして、緊急性の高い損傷をその場でコンサルトし、そうでなければ翌日に整形外科受診を依頼することで十分と言えるかもしれません。しかし救急医となれば求められるレベルは異なります。ほとんどの脱臼を整復し、手術適応が生じれば急性期病院である自施設の外来に、保存加療の対象であればかかりつけのクリニックに紹介することができてはじめて、適切な転帰の決定ができていえるのではないのでしょうか。また、整形外科のアクセスがそれほどよくない地域では保存加療の可能な骨折は自分でフォローアップをすることもあるかもしれません。骨折診療の一翼を担うには、急性期の知識においては専門科と同等のレベルが求められるのです。

その一方で「救急外来で“骨折はありません”と言うのは避ける」という金言もあるように、急性期にすべての骨折が見つからないことや、遅れて手術適応が生じてくることもあります。そう考えると非整形外科医である救急やプライマリ・ケアの医師にはある意味での謙虚さも必要とされます。

本書の原著は専門医へのアクセスがいささか悪い米国で家庭医療の医師たちによって書かれた骨折のマネジメントに係る専門書です。急性期の対応と保存加療、専門科への紹介のタイミングに重点がおかれ、手術手技以外の骨折診療を詳細に解説しており、そのレベルは前述した本邦の救急医の達成目標と高い親和性があります。そうした点から当院のレジデントの間で骨折の学習に最適な教科書として口伝されていました。しかし多数の解剖用語が英語で書かれていることから理解が難しく、一般に勧めにくい面もありました。そこで、日本語での類書がないことも手伝って翻訳を行う機会をいただき、全国の救急医、プライマリ・ケア医の協力を得て日本語版を出版することとなりました。整形外科との架け橋に、救急、プライマリ・ケアと整形外科の双方の事情を知る仲田和正先生に監修をお願いできる僥倖にも恵まれました。

本書が、プライマリ・ケア領域や救急外来で骨折診療にあたる医師のみならず整形外科の専攻医にとって外来における骨折診療のレベルを一段引き上げてくれるものとなれば幸いです。

最後に、コロナ禍に粘り強く翻訳に取り組んでくれたみなさま、常に相談に乗ってくれた羊土社の中田さん、清水さんに深くお礼申し上げます。

2022年2月 監訳者を代表して

東京ベイ・浦安市川医療センター 救急集中治療科
船越 拓